

2019 年 12 月 1 日（日）「ペテロの目覚め」

マタイ 26:69-75

69 ペテロが外の中庭にすわっていると、女中のひとりが来て言った。「あなたも、ガリラヤ人イエスといっしょにいましたね。」70 しかし、ペテロはみなの前でそれを打ち消して、「何を言っているのか、私にはわからない」と言った。71 そして、ペテロが入口まで出て行くと、ほかの女中が、彼を見て、そこにいる人々に言った。「この人はナザレ人イエスといっしょでした。」72 それで、ペテロは、またもそれを打ち消し、誓って、「そんな人は知らない」と言った。73 しばらくすると、そのあたりに立っている人々がペテロに近寄って来て、「確かに、あなたもあの仲間だ。ことばのなまりではっきりわかる」と言った。74 すると彼は、「そんな人は知らない」と言って、のろいをかけて誓い始めた。するとすぐに、鶏が鳴いた。75 そこでペテロは、「鶏が鳴く前に三度、あなたは、わたしを知らないと言います」とイエスの言われたあのことばを思い出した。そうして、彼は出て行って、激しく泣いた。

【序論】

教会暦では今日からアドベントに入りますが、先週は一週早くアドベント入りのメッセージをさせていただきました。今日と 15 日にはマタイ福音書から語らせていただき、22 日のクリスマス礼拝を迎えたいと思います。ややこじつけるようではありますが、アドベントという期間を霊の目を覚まして過ごしつつ主イエスのご降誕（来臨）を迎えるという意味で、今日の箇所は一つの心の備えとなるでしょう。霊的な眠りに取り憑かれていたペテロが、眠っていた者として当然の結果を身に招いてしまう。愛してやまない主イエスを三度も否んでしまうのです。彼の「眠り」がどのような形で現れていたかということを、後ほど詳しくお話しします。そして、私たち読者も「眠っていないか?」「目を覚ましていなさい」という主イエスの語りかけに耳を傾けていきたいと思うのです。

【本論】

時は真夜中。主イエスが逮捕された時間は夜中の 1 時半頃と考えられています。それから間もなく大祭司カヤパの邸宅で裁判が始まったのですが、この裁判は二階で行なわれていたようです。大祭司の邸宅には誰でも自由に入れるわけではありませんでした。ヨハネ福音書によりますと、使徒ヨハネが大祭司と知り合いであったため、その伝でペ

テロも中庭に入ることができたようであります。

シモン・ペテロともうひとりの弟子は、イエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いで、イエスといっしょに大祭司の中庭に入った。しかし、ペテロは外で門のところに立っていた。それで、大祭司の知り合いである、もうひとりの弟子が出て来て、門番の女に話して、ペテロを連れて入った。(ヨハネ18:15-16)

大祭司と顔馴染みであるヨハネとは何者なのでしょうか。彼は一介の漁師でありながら、どのようにしてユダヤ教最高議会の長^{おさ}と知り合ったのか。一説によると、ヨハネはエルサレムに家を持っていて、大祭司の家と干し魚や塩漬けの魚の商取引をしていたのかもしれない。それで「門番の女」とよく顔を合わせていた可能性もある。ところが、この女性とペテロが対面したときに事態が動きました。

本論 1. 霊的に無防備な状態で敵陣にいたペテロ

ペテロが外の中庭にすわっていると、女中のひとりが来て言った。「あなたも、ガリラヤ人イエスといっしょにいましたね。」(26:69)

この箇所を並行記事と見比べてみると、色々と面白い事実が分かってまいります。まず、マルコ 14:67 には、「ペテロが火にあたっているのを見かけ、彼をじっと見つめて、言った。『あなたも、あのナザレ人、あのイエスといっしょにいましたね』」と詳しく書かれています。この時期は3月から4月初旬でありましたから、夜の空気は大変冷たかった。そこでペテロは下役たちに混じって焚き火に当たっていたのです。次に、ヨハネ 18:25 によると「一方、シモン・ペテロは立って、暖まっていた」とされていて、マタイの「すわっていた」という記事と一致しない感じがする。おそらくこれは、ペテロが立ったり座ったり落ち着かない様子を表しているのでしょう。彼は勇気を出して中庭にまで忍び込んだものの、内心非常に不安だった。それもそうでしょう。今まさに死刑判決を受けようとしているイエスの弟子であり、自分もどうなるか分からない状況なのですから。しかも、周りは敵だらけであり、まさに彼は敵陣のど真ん中にいたのです。また、彼はこれから起きてくる事態に対して心の備えがまったくできていませんでした。ゲッセマネの園で主イエスが祈っておられたとき、彼は再三「目覚めて、祈っておれ」と言われていたにも拘らず、ついに主イエスの祈りが終わるその時まで眠り続けていたのです。この肉体的な眠りは、ペテロの霊的眠りと一致していました。彼の霊が眠っていたことを表す一つの出来事があった。それは、主イエスが捕縛された時、彼が剣をもって敵に斬りかかって行ったという出来事です。これは、この世の力ー剣には剣をもって対抗するーというあり方、主イエスがこれまでに教えてきた神の国の平和とは真逆のあり方でした。極め

て刹那的であり、思慮深く行動したとは到底言えない醜態でした。このところに、ペテロの霊的状态の落ち着かなさ、何をしたらよいかが分からない心の不安定が表れているでしょう。主イエスは祈りの途中に三度弟子たちを見に来られましたが、いずれも眠りの只中にあった。主イエスは祈りを通して神の御心を受け入れ、これから始まる熾烈な戦いへの心の備えをなさっていました。一方、ペテロをはじめとする弟子たちは霊的に眠り込み、まったく備えのできていない状態で戦いの火蓋が切られてしまったのです。

女中はどんな口調でペテロに話しかけたのでしょうか。彼女は暗がりの中、焚き火の火に照らし出されたペテロを見て、見覚えのある顔だと認識しました。ペテロが常に主イエスに付き従っていた様子を覚えていたのでしょうか。「女中」という言葉は「ひとりの女の召使い」「女奴隷」とも訳すことができますが、当時の社会において一人前の扱いを受けていない未婚の女性を表します。彼女の言葉の中に「ガリラヤ人イエス」という表現が出てくることに注目したい。エルサレム在住の人にとって、ガリラヤ人とは「田舎者」を表し、やや侮蔑的なニュアンスが含まれています。二度目の「ナザレ人」は、ナザレがガリラヤよりももっと田舎の寒村でありますから、更に蔑んだ表現となる。この女中の言葉から主イエスと弟子たちへの敬意を感じ取ることはできません。ペテロにとって、まさに「断罪」の響きをもつ言葉でした。彼はこの少女の一言に慄き、とっさに自己保身に入ってしまう。

しかし、ペテロはみなの前でそれを打ち消して、「何を言っているのか、私にはわからない」と言った。(26:70)

彼はこの時、主イエスとの関係を直接否定しているわけではなく、女中の言ったことを打ち消す形でその場を凌ごうとしています。しかし、これは間接的に主イエスとの関係を否定することに他なりません。

この時、ペテロは主の弟子としてこの上ない証の機会を得ていたはずなのです。邸宅の二階では、主イエスが大勢の敵を前に、公然とご自身を証ししておられる。「あなたは神の子キリストなのか」「あなたの言うとおりです」(26:63-64)。それに対し、ペテロは主イエスとの関係をはぐらかし、キリストの証人とは程遠い態度を示してしまいます。

まずここで、私たち読者に問われてくることがある。それは、私たちが社会で生きるときに、思いがけないタイミングで自分がクリスチャンであることを証しする機会が訪れるということです。その時に私たちはどのように振舞ってきただろうか。私は現在牧師という立場にありますので、隠しようがないのですが、過去には失敗があります。以前にも話したことがあるかもしれませんが、何度でも語らなくてはならないでしょう。私が通っていた高校は男子校で、クリスチャンはほとんどいませんでした。倫理の授業で「山上の垂訓」が扱われたときに、先生が「この中にクリスチャンはいますか？」と

いきなり問うたことがあります。それは思いがけない時に訪れた証の機会でした。先生は何の悪気もなく、深い意図もなかったと思いますが、私は一瞬固まりました。私の頭は急回転し、手を上げるべきか否かグルグルと葛藤していました。全身が熱く火照り、脂汗のようなものが出てきました。そうこうしているうちに、授業は進んでいってしまったのです。その「時」は二度と帰ってきませんでした。私はその日、深い敗北感を覚えた。主を証しできなかった悔しさと自分の不確かな生き方に苦しんだのです。私の中で、常日頃からキリストを証ししようという心備えができていなかった、靈的に眠っていた、そのことが示された決定的な出来事でした。

本論 2. 自分が主を否認していることに気づいていないペテロ

そして、ペテロが入口まで出て行くと、ほかの女中が、彼を見て、そこにいる人々に言った。「この人はナザレ人イエスといっしょでした。」それで、ペテロは、またもそれを打ち消し、誓って、「そんな人は知らない」と言った。(26:71-72)

ペテロに次の証の瞬間が訪れました。彼は「入口まで出て行った」ようではありますが、焚き火から離れ、自分の素性がバレないように、そしていつでも逃げられる準備をしようとしたのでしょう。ところが、追い打ちをかけるかのように、「ほかの女中」がペテロとイエスの関係を証言し始めたのです。マルコ 14:69 では先の女中と同じ人物が語っているように見えます。

すると女中は、ペテロを見て、そばに立っていた人たちに、また、「この人はあの仲間です」と言いました。

原文では「女中」に不定冠詞 (a) が付いているため、「その女中」という意味ではありませんが、「再び」という言葉が入ってもいます。おそらく、先の女中と別の女中が声を合わせて証言したということなのでしょう。ペテロの逃げ場が失われていく。そして、彼のイエス否認もまた輪をかけたものになっていく。二度目にペテロが言った言葉は決定的です。「そんな人は知らない」と。「イエス？誰だ、そいつは？」「そんな名前、聞いたこともねえぞ」。三年間寝食を共にしてきた主と無関係であると偽りの証言をしたのです。虚偽というものは、ひとたび入り込むと收拾がつかなくなります。一度目の嘘を隠すために、嘘に嘘を上塗りする形となる。そして、三度目がやってきます。

しばらくすると、そのあたりに立っている人々がペテロに近寄って来て、「確かに、あなたもあの仲間だ。ことばのなまりではっきりわかる」と言った。すると彼は、「そんな人は知らない」と言って、のろいをかけて誓い始めた。(26:73-74a)

三度目の否認は、二度目から 1 時間ほど経過したときに起きたようです。

それから一時間ほどたつと、また別の男が強く主張した。「確かにこの人も彼と一緒にだった。ガリラヤ人だから。」(ルカ 22:59)

この1時間、ペテロはどんな心境でいたのでしょうか。どうにか誤魔化そうと、そこにいる人々とできる限り明るい声で話していたのではないか。しかし、彼の大きな声は大変特徴あるものだった。彼が日常会話で使っていたと思われるアラム語は、ガリラヤ訛りであり、聞く人たちにはすぐにそれと分かるものだったようです。喉音や sh と t の発音がはっきりしなかったといえます。妻もスーパーで讃岐弁が聞こえてくるとピンとくるものがあるそうです。「ようけ買うたなあ」などと聞こえると、どの辺の出身者であるかがすぐに分かります。

ヨハネの記録によると、ペテロが主イエスの弟子であることを決定づける証言があったようです。彼が先般剣で耳を切り落とした大祭司のしもべの親類がそこにいたということです。

大祭司のしもべのひとりで、ペテロに耳を切り落とされた人の親類に当たる者が言った。「私が見なかったとでもいうのですか。あなたは園であの人といっしょにいました。」

(ヨハネ 18:26)

動かぬ証拠を突きつけられたペテロは恐怖に慄き、今度は「呪いをかけて」主イエスとの無関係性を誓ってしまいました。「呪いをかける」とは、もし自分の語っていることが偽りであるなら如何なる罰を受けても構わないという趣旨です。しかも、「誓い始めた」とあるように、繰り返し「本当なんだ」「信じてくれ」と主張したことが窺える。この時のペテロはおそらく自分が主を否認しているとは思っていないことに注目したい。自分が何をしているのかが分からない。否認を否認とは思っていない。彼の霊の目は閉ざされていました。私たちもまた、様々な形で主を否む危険性を孕んだ存在ではないでしょうか。自分がキリスト者であることを語らないことによって、その沈黙により、実は主を否定しているということがある。あるいは、神ならぬものを愛することによって、本質的にキリスト者である自分を否定していることもあるでしょう。ペテロの問題は他人事^{ひとごと}ではありません。

本論 3. 我に返ったペテロ

するとすぐに、鶏が鳴いた。そこでペテロは、「鶏が鳴く前に三度、あなたは、わたしを知らないと言います」とイエスの言われたあのことばを思い出した。そうして、彼は出て行って、激しく泣いた。(26:74b-75)

ペテロが三度の偽証をしてすぐ、鶏が鳴きました。実際には二度鳴いたようですが、こ

ここには一度しか書かれていません。一度目の鶏鳴もあったはずですが、ペテロには聞こえていなかったようです。しかし、彼はこの鶏の声でハッと我に返りました。自分が何をしてしまったかに気づいたのです。ルカはこの時、「**主が振り向いてペテロを見つめられた**」と記しています（ルカ 22:61）。二階におられる主イエスと中庭にいるペテロの位置関係はよく分からないのですが、外でガヤガヤと騒いでいる声は主の耳に聞こえていたのでしょう。ペテロの言葉も主は聞いておられた。そして、ペテロの惨めな姿を深く憐れんで、目を注がれました。ペテロと主イエスの目が合った。そのとき初めてペテロは自分の罪に気づいたのです。彼はもはやその場に居ることができなくなり、門を飛び出し、外で号泣しました。

この時のペテロの涙にはどのような意味があるのでしょうか。一つははっきりと言えることは、彼は自分の罪を悔いた、そして開き直らなかったということです。自分の罪を認め、主イエスの御前に立ち果せぬ存在であることを知った。皆さん、ここにこそ真の霊的開眼があるのです。信仰とは何だったのでしょうか。神の御前に立つことのできないこのような自分でさえも救い得る神の恵みの大きさを信じるということではなかったか。即ち、ペテロは主を否定しながら、実は真の信仰に至ったのです。それは、主の赦しと深い憐れみの眼差しに捉えられたからです。

数時間前のペテロはどうだったのでしょうか。彼は最後の晩餐の席で「**たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません**」（26:33）と豪語していました。しかし、この自分の力に頼る態度には、信仰とはかけ離れた「霊的眠り」の兆候があったのです。そして、眠りは深まり、ゲッセマネの園では本当の眠りに陥ってしまった。そのようなまったく無防備な状態で戦いに臨み、剣をもって敵に斬りかかり、それでも敵の数の多さになす術なく一度は逃げ出しました。しかし、命を賭して主に従うと誓った手前、彼は戻って来て、人目につかない形で主に付いて行きました。実はこのところにも彼の霊的眠りが表れていた。自分を堂々と主の弟子であるとは証言できない彼の姿があったのです。そして、この一連の態度はついに結実し、三度の否認に至りました。

【結論】

今日の箇所は、二つの事柄を一つに絡めた結論をもっていると言えるでしょう。第一に、主の証人として心の備えをしていないで生きていることの危険性を教えている。私たちの生き方が問われます。思いがけない時に主を証ししなくてはならない機会が訪れる。その時に迷わず「私はそれです」「私はキリスト者です」と答え得るように、常日頃から祈りの生活をしていなくてはなりません。同時に、主を証しすることに失敗する

私たちへの赦し、慰め、励ましも語られているでしょう。ペテロは人生最大の失態を犯したにも拘らず、彼と主イエスの関係はなくならなかった。主は彼の弱さのすべてを知ったうえで、彼を受け入れてくださっていました。そして、復活後、彼に特別な機会を与え、三度に亘って「わたしを愛するか」と問いかけ、彼の罪をすべて拭ってくださいました（ヨハネ 21 章）。私たちにも同じような経験があるかもしれません。今まで曖昧な態度で生きてきた自分に気づかされた人もいるでしょう。今一度自分の信仰を見直し、主の愛のうちに憩い、キリスト者としての自分を取り戻したいと思います。重要なことは、失敗した自分を神の御前に言い訳しないということです。悔い改めるところに赦しは与えられるのですから。

【祈り】

憐れみ深いイエス様。ペテロに向けられたあなたの眼差しは何を語っていたのでしょうか。自分を偽り続けるペテロ、自分を傷つけ続けるペテロを憐れまれたのではないのでしょうか。主よ、私たちにも同じ弱さがあります。どうか、私たちにも霊的な開眼を与え、過去にあなたを否認してしまった事実がありましたら、それに気づかせてください。そして、赦しにあずかり、どんな時にも主の証人となるように、祈りの生活を続けることができるよう、チャンスと励ましをお与えください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
主に従う者一人一人に、証の機会を備え給う、父なる神の愛。
三度の否認という決定的過ちを犯したペテロを憐れみ、その霊の眠りを醒させ給うた、
主イエス・キリストの恵み。
如何なる背信にも、悔い改めるところに赦しを与え、再び主の証人として立たせ給う、
聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。